

心・技・体バランスのとれた技能者をめざして

住友林業建築技術専門学校 校長 水戸 潔

1. はじめに

1996年1月総務庁が行った世論調査による日本人の住宅に対する嗜好調査の結果、木造住宅を選んだ者は81.6%であった(「森林・林業に関する世論調査」)。

しかるに、現実に木造の家を建てた人は46%しかない(1999年、建設省建設着工統計報告)。かつて1960年代は新築住宅の木造比率は60%以上であったが、ここ数年この比率(46%台)は変わっていない。このギャップはどこから来たのであろうか。

日本人の住宅に対する嗜好が急に变化したとは考えられない。そこで考えられるのは、木造住宅の生産を担う大工技能者の減少、そして顧客のニーズに応えられる資質を持った工務店の減少ということではあるまいか。とすれば、この現象は重大な問題提起を含んでいる。

2. 一住宅メーカーの歩んだ道

当校の母体会社である住友林業(株)の住宅生産のたどった道を簡単に振り返ってみたい。

当社は1975年に住宅事業に参入したのであるが、当初自前の生産手段を持ち合わせず、もっぱら外部の工務店にその生産をゆだねる形でスタートした。その中から出てきた問題は、旧態依然とした工法、工務店の力量のばらつき(当然品質のばらつき)、ということであった。

そこで、その10年後の1885年、住宅の生産の合理化を具現化するリーディングカンパニーとして、直営工務店(スミリン建設(株))を設立する。しかし、設立したものの、その生産合理化を担ってくれる若き技能者を労働市場で獲得することはきわめて困難であった。そこで、必要な人材を自前で養成すべく、1988年当校が設立されたのである。以来、普通訓練修了者531名、短期訓練修了者299名を送り出して今日に至っている。

3. 当校の歩んできた道

当校は、前述のように1988年に企業内認定訓練校として発足し、毎年約60名の新規入職者(18歳)を受け入れ、技能者(建築大工)の養成を行ってきた。

しかし、1990年代に入り、日本のバブル経済が終わりを告げ、住宅建設も年間160万戸の時代から120万戸に移り、住宅産業が「量から質へ」そして「フローからストックへ」の時代に移って来るにつれ、技能者養成のニーズも「量の充足から質の充足へ」移ってきたのである。

それに呼応して、1996年より、養成人数を30名前後に絞り、文字どおり質の高い技能者の養成へと移っていった。そして、当校を修了して、中堅として活躍している技能社員を再度入校させ、短期の向上訓練も行うようになった。

一方、信頼性の高い良質の住宅を供給するためには技能者養成のみではなく、設計、監理、営業などに携わる社員の現場経験をベースにした、総合的な

トレーニングも必要であるとの認識が高まり、1996年より住友林業・住宅系新入社員全員の短期訓練、リフォーム、メンテナンス関連会社の社員の短期訓練なども行われるようになって今日に至っている。

以下、誌面の関係でそのすべてを紹介することができないので、普通訓練について報告する。

4. 当校の教育訓練の理念

技能者養成とは何であろうか。それはその職種に求められている「技能者像」を明らかにし、その技能者像に可能な限り近い人材を養成することであろう。「訓練ノウハウ」とは、そのための5W1Hが明確になっていることであろう。当校では、発足当初、大工技能者が不足しているという状況から、とにかく数の充足に重点を置いて養成を行ってきたが、「質の充足へ」という業界および現場のニーズに対応するため、まずアンケートにより派遣事業主および職場のニーズ調査を徹底的に実施した。その結果出てきたニーズが「心・技・体バランスのとれた技能者」がほしいということであった。

1995年、当校の訓練理念を新たに「心・技・体バランスのとれた技能者の養成」とし、訓練生には「心・技・体バランスのとれた技能者をめざそう」というスローガンを与え、今日に至っている。

5. 訓練カリキュラム

以上の教育訓練理念に基づいて、当校では表1のカリキュラム、および表2の年間スケジュールに従って、訓練を行っている。以下、このカリキュラム、年間スケジュールに組み込まれている心・技・体のテーマについて述べる。

6. 「心」というテーマについて

「挨拶がきちんとできること」「ほう・れん・そう（報告・連絡・相談）ができること」「時間と約束を守ること」「整理整頓がきちんとできること」などは、大工技能者にとって施主の信頼を得るうえ

で最も基本的な素養であろう。すなわち職業人としての心構えとマナーである。これについては、家の建築に例えれば「基礎」あるいは「土台」に匹敵するものであり、当校では、訓練生が入校したならば、早く道具を使いたい、早く物を作りたいというはやる気持ちを抑えて、まず徹底した、心構え教育、マナー教育を実施する。

約1ヵ月の基本的なマナー教育の後、それを維持するため、朝礼時の挨拶の練習、朝の掃除、自室の掃除整理整頓を1年間継続する。これについては、教職員がきちんとついて指導し、評価も行う。これらのことについて、模範となる者は見逃さず表彰する。生活および訓練マナーについては、隠しテーマとして毎月テーマを決め、模範となる者、向上の著しい者は月間MVPとして表彰する。もちろん不徹底な者は厳しい指導と、からっとしたペナルティもある（例えば、体力増強を兼ねて朝のジョギング1周追加など）。

当校は全寮制であるため、訓練以外の生活指導も厳しく行っている。

もう1つ訓練生のモチベーションアップという点から、春休みや夏休みに自分の郷里にある木造文化財または木造建築物を訪ねさせ、自分で撮った写真を添付して提出させる。

これは予想外の効果をもたらす。すなわち、自分の郷里にはこんな素晴らしい木造建築や木造文化があったのかという新鮮な発見と感動である。パソコン操作練習も兼ねて、ワープロで清書し本人が保管するものと学校で保管するもの2部作成させ、提出させる。優秀な作品は表彰する。このようにして、木造建築に対する興味とそれにかかわる職業への誇りを醸成させるのである。

7. 「技」というテーマについて

現代の若者に技（技能）を教える前に1つの問題がある。われわれ養成する側にとって自明のことである「大工技能者になる」という目的ないし目標が、若者にとって必ずしも自明でないことが多い。すなわち、目的がはっきりしないまま一種のモラトリア

表1 訓練カリキュラム

		建築施工系												木造建築科			普通課程			学年	
区	科 目	月別												合 計							
		計画	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計画	実施率					
普通	集合訓練	社会	44	14	3	3	9	2	5	4	5	4	4		97						
		体育	6	3	5	7	4	6	9	4	5	2	2		53						
普通学科計		計画	50	17	8	10	13	8	14	8	10	6	6	150							
基礎	集合訓練	建築概論		10				5							15						
		建築生産概論		12		8									20						
		建築計画				10									10						
		建築構造				12									12						
		建築設備				16									16						
		測量					8								8						
		建築設計製図				16	16								32						
		構造力学				10									10						
		建築法規					10								10						
		安全衛生		4			2		8		6				20						
		建築施工法		10											10						
		品質・工程管理						12							12						
基礎学科計		計画	14	22	64	56		13		6				175							
専攻	集合訓練	木質構造			16	16								32							
		木造建築施工法	8	4	6				14			6		38							
		建築材料		8	8	8								24							
		規矩術						30	12					42							
		工作法	12	20										32							
		仕様及び積算					12							12							
専攻学科計		計画	20	32	30	36		30	26			6	180								
基礎	実技訓練	測量基本実習					8							8							
		機械操作基本実習		24										24							
		パソコン操作基本実習		16										16							
		安全衛生作業法				12			8				24	44							
		器工具使用法	28	20	28	2	6	2	2	4	2	3	6	103							
基礎実技計		計画	28	60	28	14	14	2	10	4	2	3	30	195							
専攻	実技訓練	工作基本作業		6	58	36	41							141							
		工作実習							48	59	51	26		184							
		建築施工基本作業				20	44	64	53					181							
		建築施工実習				24	56	72	48	48	40			288							
		建築工作実習							56	40	40			136							
		建築基礎作業		16										16							
専攻実技計		計画		22	58	56	109	120	125	152	147	131	26	946							
応用	分散訓練	現場仮配属訓練 (事業所内訓練)											88	96	184						
応用実技計		計画											88	96	184						
学科 + 実技 合計		計画	112	153	188	172	136	173	175	170	159	146	150	96	1,830						
		実施率																			

短期課程 受託(含・特別)訓練	養成訓練	現場監督者コース (第1回)	現場監督者(メンテナン)コース (第1回)	現場監督者コース 6回 (林業)
	向上訓練 技能五輪 準備訓練 *地域 ボランティア 講習	現場監督者コース (第2回) (第3回) (第4回) (第5回) (第6回) (第7回)	現場監督者(メンテナン)コース (第1回)	現場監督者コース 1回 (ホームテック)
		8 / 下旬 技能五輪全国大会出場者訓練 11 / 上旬 (第1回) 技能検定(2級)実技試験準備講習 *ものづくり体験講習	和室造作コース	和室造作コース 1回
			床の間造作 (第1回)	床の間造作コース 1回
				技能検定準備コース 1回 (2級)
				五輪全国コース 1回
				*ものづくり体験コース 1回

ム状態で入職してくる者が結構多い。そこで、当校は、いきなり遠くの峰を見せるのではなく、足下のきれいな花を見せ、花を摘んでいるうちに山道を登り、峰にたどり着くという手法をとっている。その意味では、技を教えるという行為は「志」を作るという行為でもある。

さて、技能訓練において、まずわれわれは「到達すべき技能レベル」を時間を横軸にとり明確にする。そして、個人個人の技能のレベルを確認するため、実技試験を定期的実施する。その結果、レベルに達していない者は放課後自主的に残らせ、個別に指導する一方、優秀な者あるいは進歩の著しい者は見逃さず表彰する。彼らは全く予想していなかったことで表彰され、職業生活ではこんなことも見られているのかということに気づくようである。

当校の実技訓練の中で特徴的なものとして、商品



写真1 入校の頃、まだ表情にあどけなさが残る



写真2 工作基本作業の指導風景



写真3 訓練生が建てた家の前で、施主さまと一緒に記念写真

としての「住友林業の家」を実際に建てさせる訓練がある。その前にまず校内で実物大の「モデル棟」を建てさせ、一軒の家を建てることを一通り経験させた後、この訓練に入る。指導員はつくが、プロの大工は入れない。

このようにして、商品としての一軒の家ができあがり、お客さまに引き渡されるのを目の当たりにしたときの、彼らの達成感と感激は、ひとしおであり、ここにいたって「大工になって良かった！」という確信は不動のものとなる。

訓練生の建てた家は開校以来25棟となり、今年も2棟の建築に取り組んでいる。

そして、これと平行して実際に建てている家の1/10の構造模型製作も行わせる。これもただ行わせるのではなく、8～10名のチームに分け、そのチームを会社組織にして、コンペを行う。納期、コスト、品質、チームワークなどの観点から評価し、優秀チームは表彰する。この経験を通して、組織の中で働くことがいかなることなのかを学ぶとともに、本来の技能である図面の読み方、材料の名称、寸法、機能、納まりなども身につけていくのである。

一方、当校の訓練生にとって「技能五輪・建築大工職」に出場することは、高校野球の甲子園出場のように憧れの的である。

当校ではこれを若者の自己実現と、より高い技能への挑戦の機会ととらえ、出場を積極的に奨励している。1995年の千葉県予選から参加を開始し、本年に至るまで連続5回全国大会出場者を出し、1998年には全国大会で梶田章（現東海スミリン建設所属）が優勝、99年の技能五輪国際大会では6位・敢闘賞に入賞した。

昨年までは、校内選考で選ばれた者を千葉予選に



写真4 構造模型製作中



写真5 構造模型の完成、表彰



写真6 技能五輪国際大会に出場した梶田選手(中央)と作品

出場させていたが、本年度からは訓練生全員に出場させることにした。

8. 「体」というテーマについて

現場から求められるニーズとして、現場で通用する「体力」と「健康」がある。これについても、到達すべきレベル(握力、背筋力、持久力など)を設定し、それに向けてプログラムを組んでいる。基礎的な体力増強法として、早朝のジョギング、朝礼時の腕力のみによる綱登り(高所に慣れることもねらっている)、腕立て伏せ(回数がだんだん増えていく)などである。応用体力増強法としては「ワークスポーツ」と称して、現場ですぐ役に立つ「角材運び」「石膏ボード運び」「釘打ち競争」などを定期的に行い、ゲーム感覚で取り組ませている。これについても、優秀な者、進歩の著しい者は表彰し、レベルに達していない者は、個別に指導し、レベルアップを図っている。

このように1年間「心技体」という3つのテーマについて必要なレベルまで身につけた訓練生は期末の「技能照査」を受け、技能士補の資格を得て各所属会社へ帰っていくのである。

9. 今後の課題

去る6月22日、今年度職業能力開発総合大学校に



写真7 ワークスポーツ風景、角材運び

入校した建築工学科および造形工学科の学生40名が教員と共に当校に見学に来られた。

最後の質問のとき、ある学生から「次の世代を担う技能者の養成あるいは技能者像をどのように考えているか」という主旨の質問を受けた。私はそれに対し、これは私にとって非常に重い問いかけであり、これからじっくり探求していくべき課題であるが、今私の頭の中にある答えは、次世代の技能者像は「自律的技能者」であり、そのような技能者を養成することが、これからの課題であろうと答えた。

あとから、その答えを反芻してみて、ある程度正鵠を得た答えではなかったかと思っている。

今、大工仕事はプレカット化が進み、作業が分割化され、非常におもしろくないものになってきている。若者が技能五輪出場にあこがれを持ち、非常に熱意を持って取り組むのは、あるいはこの現実を本能的にかぎ取っているからかもしれない。

そのようなとき、ただ与えられた仕事を機械的にこなすのではなく、自律的かつクリエイティブに仕事に取り組むことのできる技能者、そして企画、設計、販売分門にインターフェイス的役割を果たすことができる技能者こそ、次世代の求める技能者であり、そのような技能者を養成することが、われわれに与えられた課題であろうと考える。

そしてそのことによって彼らは仕事のおもしろさと自己実現の機会を取り戻すことができると期待している。